

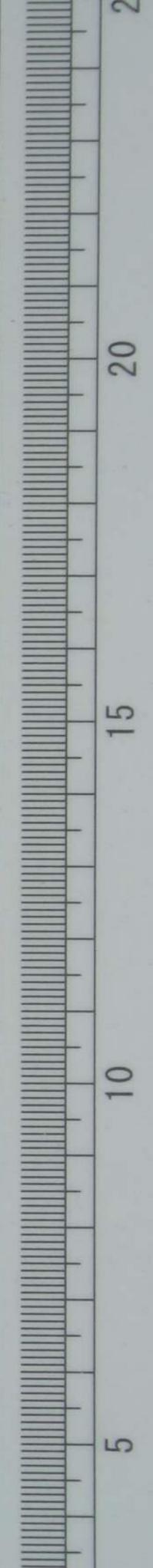


子 孫
吹 越 過 想 行 走

第 六 歌 集

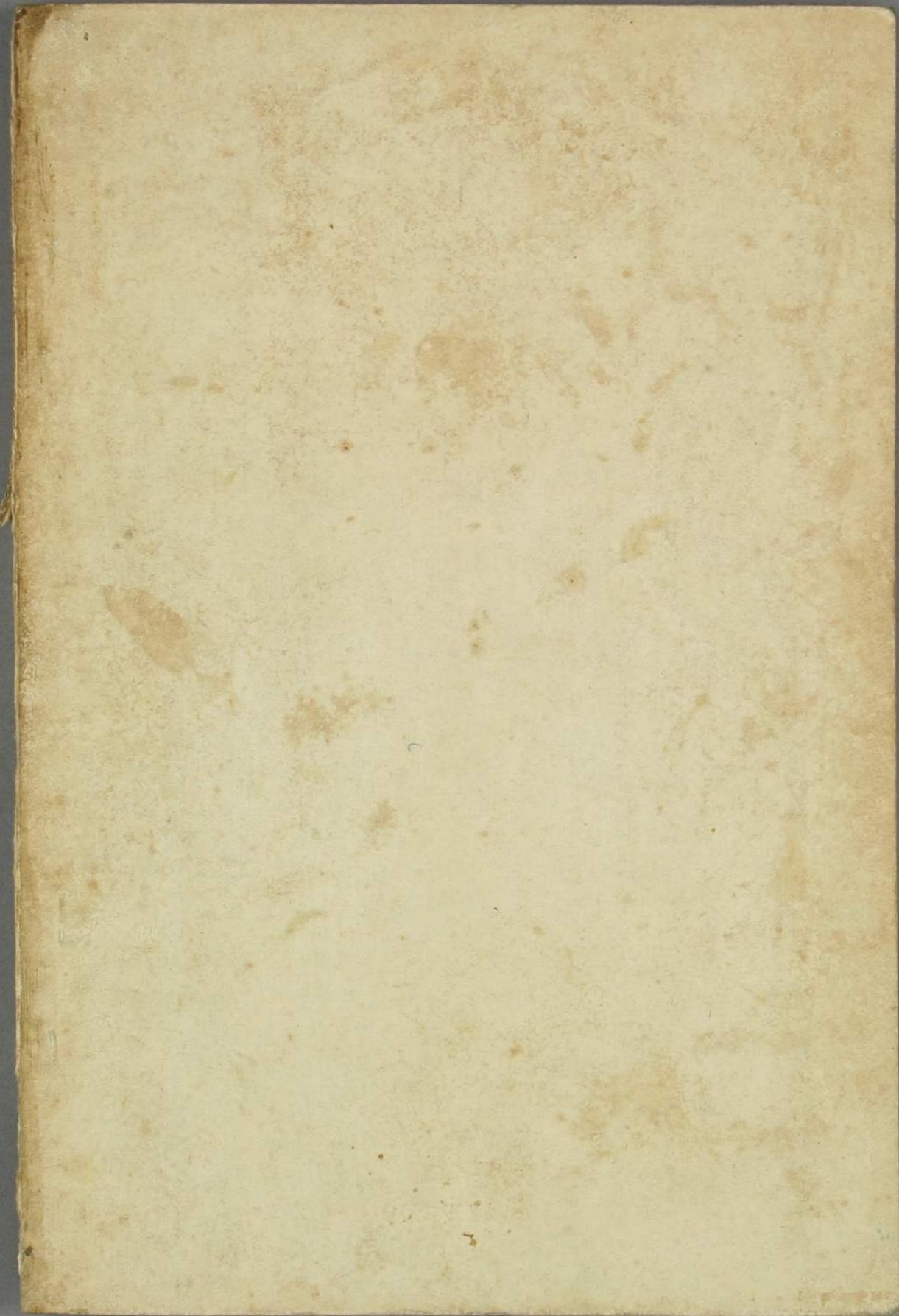


小 田 島 孤 舟 著



火をも過ぎ行

小田島



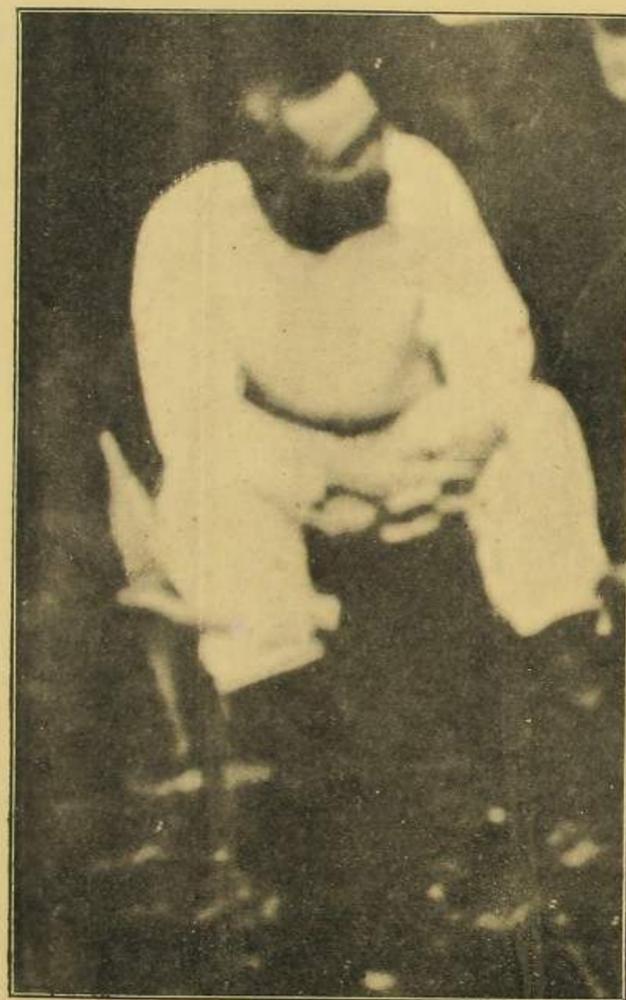


火をも過ぎ行きて

小田島孤舟著



火の國の行状記



目次

辛夷花咲く里にて

十一月八日	一
分教室にて	七
敷地にて	九
奥中山峠にて	二二
小腸炎	一六
月待庵にて	一八
晴耕庵にて	二三

岩手公園のほとりにて……………二五

原首相別邸……………三一

病床にて……………三二

枕頭の軸を眺めて……………三四

八郎湯を思ひ出でて……………三六

出郷の歌……………三七

寒風山……………四〇

杜陵にて

橋畔に住みて……………四一

冬の旅……………四九

志戸平温泉にて……………四九

大澤温泉にて……………五五

平泉にて……………五九

毛越寺にて……………六二

岩谷堂を経て小山田へ……………六四

教會にやどりて……………六七

氷上運動會……………六九

小岩井行……………七一

湘南へ	七四
車中にて	七八
日光にて	七九
江の島にて	七九
二重橋前にて	八〇
松島にて	八〇
姫神登山	八四
攝政宮を仰ぎ奉りて	八六
田澤湖行	九一

松尾にて	一〇四
木三別邸にて	一〇八
觀武ヶ原にて	一一一
秋の庭にて	一一七
その一——白梅校にて	一一七
その二——わが庭にて	一二四
その三——白梅校にて	一二八
大慈寺の傍に住みて	一三三
表紙畫	萬鐵五郎氏

辛夷花咲く里にて

十一月八日

うら庭にいづるやまともに学校の燃えあがれるをわれはみしはも

学校のもえあがれるをまともにも見しつかのまをわれは忘れず

校門にかけつくるまを火はうつり校舎は炎ほのほの
海となりけり

ことすてにきはまりにければもえあがるまゝ
にまかせてみつめるにけり

大君おほきみのみえいはすてにやけたりときゝしたま
ゆらわれは忘れず

すべもなく素足すそあしのまゝに立ちをれば草履もて
來てはかせけるかな

大いなるわがあやまちをせむるこゑ火の子に
まじりきこえ來にけり

身を投げてさばきをうけんとみじろかず火の
子のなかにわれ立てりけり

のゝしれるをのこのかげも消えうせてわれは
ふたゝびさばきを聞かず

風たつな火はうつるなと兩の手をかたくにぎ
りて火の海に立つ

わが父はうせぬとみち子泣く泣くもかへりゆ
きしと告げし子はあり

わがありがさがしまはれどみあたらず泣く泣
くみち子かへれりとさく

もえ上る炎は風にあほられてうしろの丘の笹
やぶをやく

火の子らのうちしづまれは東雲しのいの白みわたり
て鶏のなく

一夜ひとよさになべてのものは滅ほろびたりたゞ一握ひとつかの
灰はいをのこして

學校のやけしことさへ知らざる子ガパンをさ
げてかよひきたれり

わがあとに子等は泣く泣くしたがひて焼けの
こりたる校門に入る

分教室にて

鉛筆のやけのこりなど拾ひつゝ、幼子らはもか
へり行くなり

戸をあけて子等のおとづれ待ちをれば日ざし
あかるく庭をてらせり

たゞひとり山下庵に子らまてば小鳥は庭にさ
へづりにけり

風立ちて庭の小笹のそよぐ音小鳥のなく音さ
やかにきこゆ

板の上に子等はあぐらしさむくと身を片寄
せて授業うけをり

やけあとにつもりし雪の消えそめて若草の芽
の青み出でけり

鍬ふりて敷地の土を掘りくづす校長の脊を春
の風吹く(新校舎敷地にて)

教へ子らみなトロンコに集りて土を運べり敷
地つくと

學校の敷地つくと山畑をほりくづしつつ鶯
をさく

みはらしのよき山畑を平げてしき地つくるも
梅の咲く日に

一村^{ひとむら}のをとこ女はうち出て敷地つくれり鶯
のなく

とりよるふ杉の木のまに溪^{たに}はみえ街^{まち}の灯^ひはみ
ゆこゝの敷地は

目の下に春の夕^{ゆふ}灯^ひのともりたる家^{いへ}並^{なみ}みゆれこ
この敷地は

奥中山峠にて

岩手山を詠める歌、五月二日

みちのくの青垣山のふもとみちたどりて行け
ば岩手山みゆ

うねりたる中山峠ゆき行けば岩手の山は見え
がくれすも

またしても岩手秀つ嶺のあらはれて片そぎ立
てりうち霞みつゝ

峠路をのぼりてみれば岩手山まともにそびえ
ふもとかすめり

みちのくの中つ國原かぎり立つ岩手の山はう
すがすみせり

國原のもなかに立てる岩手山うすがすみつゝ
間ま近ぢかくはみゆ

峠路を行けば間近くせまり來る岩手の山に雪
白く見ゆ

峠路に立ちてわがみる岩手山片そぎ立ちて雪
を残せる

こゝにしてうちみわたせばみちのくの岩手の
山はあらはなるかも

みちのくのはたてをさして靡なきたる山脈やまなでのひ
だ雪白くみゆ

こゝにしてみれば女か夫をの山二つ並び立ちをり
霞のなかに(岩手山と姫神山)

小腸炎

六月下旬、腸を患ひて床に臥せり、その折の歌

腹いたみうつ／＼床にひそみつゝくすしを待
てどくすし來らず

またしても腸のうねりのたえがたきいたみに
うめけば汗にじみいづ

いたづきをちのづからなるなり行きにうちま
かせつゝ遠蛙さく(枕頭にて臘扇忌催さる)

うつ／＼と夜は夜もすがら眠られず明方ちか
きほととぎすさく

月待庵にて

絞染、洗濯の講習會を開きし折の歌、八月下旬

狭布^さほせば秀枝^ううなだれゆらぎつゝ、弾^はきてお
きぬ庭のはうき草

庭さきのところくくにたけのびし草の上^上枝^枝ゆ
布^布垂^垂らしたり

をとめらのきそひて染めし絞ぞめ庭木のうれ
にかけて干すみゆ

紅^紅のいろに染めたるハンカチのかるくゆれを
り小草^小のうれに

くきやかに丈をこえたる日向葵^日の上^上枝^枝下^下枝^枝に
狭布^狭さらしたり

狭布かけて干せば上枝の起き上りゆれて露け
し庭のはう木草

染たての狭布をかくれば紫の雫たりつゝ上枝
ゆらぐも

黄に赤に染めし細布日に干せば戶外は牙ゆれ
初秋の朝

風なきに桑の秀つ枝のゆれてをり下枝に布を
さらす真日中

倒れたるまゝに花咲き蔓のびし朝顔の上に狭
布をほしたり

庭草の上枝かすかにゆらぎつゝ下枝うなだれ
絞ほしたり

とりくくに染めし絞を植込みのほづえくに
かけてほしをり

垣内をとゆきかくゆき布をほす少女のまみの
はれし朝かな

晴耕庵にて

ごもらひてひと待ちをれば庭の木をゆすりて
すぐる風の音する

ひさにして心しづけく風の音をきくつゝこも
る山下の庵

窓あけて風のそよげる庭の木をみるとしもな
くひとり見しかな

ひとりゐてこゝろしづけくなりまさる山やま下した庵いほ
にこほろぎをさく

水いろにこゝろのすみし静けさのいやますあ
したこほろぎのなく

岩手公園のほごりにて

九月上旬

ひとしれず袖につゝめる悲しみをかたみにわ
けて旅立てるかも

白樺の木立の上にはあらはれし岩手秀つ嶺は片
そぎし山

水いろにすみたる空をくきやかに限りて立て
り岩手秀つ嶺は

松原の上に秀つ根はくきやかにあらはれにけ
り立ちて眺むる

せかれつゝ傾きながれ片寄りに波うちあがる
中津川かな

まちの灯にうつゝともなくみとれつゝ瀬の音
をきくこゝのベンチに

月の夜をベンチによりてさやかなる岩手の山
をまともにはみる

しづかなる夜の公園の灯かけゆき灯かけをか
へり蟲の音をきく

片寄りにせかるゝ波のうちあがり岸邊の草の
さゆらぎてぞをり

木のかげをぬひて月夜の公園をそゞろゆきつ
つ瀬の音をさく

川ぞひをそゞろゆきつゝ片そぎの秀つ嶺岩手
をあかず眺むる

うねりつゝ早瀬をなして片寄れる川邊の土手
に月を見しかな

一もとの松の木かげにしのみより月かたむく
までの岩手山みる

ほの白く夜目にうつりし萩の花けさをしみれ
ばこゝろときめく

おもひ出の松の木かげの朝露をふみつゝゆけ
ば岩手山みゆ

そここのペンチに腰をうつしつゝ朝明空の
岩手山みる

よべ寄りし松の根もとに萩の花伏しもなびか
ひ露をふゝめり

塀越しにひよろくのびし幹うねり枝しだれ
たる赤松のみゆ(原首相別邸二首)

植込みの松の木ぬれや竹むらのゆらぐがみゆ
れこの塀越しに

病床にて

九月下旬より腸チブスを患ひて、師走の下旬に及ぶ、その折の歌

看護婦に新聞よませしづかにも目をつぶりさ
く朝餉あさけまへかな

小さなるコップに盛りし葡萄酒をまぢつつ朝
の新聞をさく

しづかにもかうべをあげて向ひ峯たかねの紅葉もみぢをな
がめ青空をみる

けなげにもわれをみとりてたゆまざるさき子
のほづれ毛秋風の吹く

一日いちにちにたゞ一度のむカルピスをまぢつゝ幾度
床がへりせし

吾^わ妹^き子^この脊^せにもたれて起きあがり立たんとす
れば諸^{もろ}膝^{ひざ}のびず

吾^わ妹^き子^このつくりもて來^きし柴^{しば}杖^{つゑ}を諸^{もろ}手^てにつきて
窓^{まど}の邊^へに寄^よる

山^{やま}の上^{のうへ}の木^きかげに農^{のう}夫^{ふう}のつゝくばりじつと田^で
の面^{おもて}をみてゐるところ(枕頭^{まくら}の軸^{ねじ}を眺^{なが}めて四^よ首^{びし})

山^{やま}下^{のした}の小^こ田^たの中^{なか}畔^{がは}一^{いっ}匹^{びつ}の小^こ馬^{うま}を引^ひきていそげ
るをのこ

二^{ふた}もとのひよろくのびし木^きのかげに山^{やま}下^{のした}の
小^こ田^たみてゐるをのこ

みはらしのよろしき山^{やま}の木^きのかげに水^{みづ}田^でなが
めてをる男^{おとこ}

みづうみにそへる茶店ちやみせにいこひつゝ白帆うら
らにひかれるをみし（八郎湯を思ひ出でて二首）

うちつゞく田並たなみの湖うみにうらくと白帆三つ四
つうかびをるかも

出郷の歌

十二月十四日淨法寺を去る

長明が持ちしばかりのものもちて身もかるが
ろとふるさとを出づ

死しのさかひ一たびならず越えて來しわれが旅たび
路ぢのはるかなるかも

さすらひのはてしなればいつの日かこの山
里に立ちかへるらむ

ともかくも住みなれし里いくたびか稻庭山を
ふりかへりみし

みかへれば村のはづれに見おくりし教へ子ら
はもみじろきをせず

しかしがに十年あまりを住みし里ふりかへり
つゝ遠ざかりけり

残しゆく子等の生ひ立ちしのびつゝ村立ちい
づる雪の朝かな

はてしなく歩みつゞけて旅をゆくさびしきこ
ゝろ人こひやまず

湖みづうみのはてにそびえし尖とがり峯をの尖りうらゝに麓
かすめり(寒風山二首)

われゆけば湖うみのはたての尖り峯は片より立て
どすがたをかへず

杜陵にて

橋畔に住みて

十二月十四日より中津河畔に住めり、その折々の歌

わが宿やどのガラス戸越しに公園の松の梢こしに雪か
かるみゆ

盛岡の高等女学校の窓により夕やけ空の岩手
山みる

教室のガラス戸越しに杉堤手の杉の梢に雪の
山みゆ

片寄りてせかれ流るゝ瀬の音をきゝつゝ講義
はじめけるかな

長廊下ゆきつもどりつ窓毎に岩手秀つ嶺の雪
をみしかな

校庭の櫻並木の木がくれにしるけくはみゆ雪
の山脈

ストーブにしばしとてよる少女らの面ぼてり
せる雪の朝かな

岩手山しるけくみゆる教室にわれは始めて講
義しにけり

櫻の木立ち並びたる川べりのベンチに凭りて
ピアノさゝをり

川べりを片寄り流れ櫻木のかげうつしをる中
津川かな

日ざしよき窓にゐよりて杉堤手すぎづての上に波うつ
山脈をみし

中津川かたよりながれ瀬の音のたかくなりつ
つ北上に入る

瀬の音のほのにきこゆる静けさにしづもりを
りて講義するかも

雪雲ゆきぐもの群がり寄りて岩手山みるくかくし風
を起せる

見るくも岩手ほつ根に雪雲のよりくて今
朝風の冷たき

はるかにも群山の上にそり立つ早池峯岳は
ましるにぞ見ゆ

早池峯に大雪降りて群山の上に尖れる頂はみ
ゆ

残し來し子等のおもわの次ぎくにかびて
消えずクリスマス之夜

杉堤手の杉の木の間ゆ白雪のふり埋めたる東
根はみゆ

杉堤手の木の間をぬひて見えがくれ落葉拾へ
り赤きマントは

降りうづめふり埋めつゝ尖り峰の頂こよひ白
妙となる

下宿屋の火なき火鉢にすわりつゝ降る雪なが
めひとりをるかも

火の消えし火鉢によりてさむくと身をすく
めつゝ降る雪をみる

冬の旅

志戸平温泉にて

川ぞひを上りて行けば岩かげに湯宿の灯ほの
めきてみゆ(元日)

夕あかり川にうつれる湯の宿につきにけるか
な元日の旅

こよひはも雪にこもれる山裾の温泉いんすいにひたり
瀬の音をさく

湯上りを夕餉ゆふけの膳ぜんにむかひつゝひとりしづか
に河の音さく

山裾の温泉いんすいにやどり元朝のほぎことをせりひ
とりさびしく

山の湯にこゝろしづけくさかづきをとりつゝ
こよひ元朝をほぐ

湯の宿に火鉢の炭をかきおこし諸手もろてかざして
妻をし戀ふる

いづ方へゆくもこゝろに暗さかげさしそひて
來るひとり旅かな

家をいでところさだめぬさすらひの旅を行き
つゝつまをし思ふ

うさつらさわすれんとして旅を行き温泉の宿
に妻こふ元日

まどあけて山をしみれば窓下まどしたを川流れをり火
影かげうつして

あきいでゝ窓邊まどべによれば廻廊まわらうの下ながれるし
山かげの淀

二階にかいより庭の小松にちらほらと朝雪ふりて枝
たわむ見ゆ

一夜ひとよさを山ふところの湯の宿たねむりてけさ
はこゝろほがらか

つまをこひ子等しのびつゝさすらひの旅行く
朝を雪に吹かるゝ

こよひはもいづくの空をさまよはむはてしな
き旅さすらひの旅

いづ方へさして行かなむ川ぞひを雪に吹かれ
て温泉をば立つ

大澤温泉にて

溪川を見おろしつゝも上り行くひとりのわれ
に雪ふりかゝる(二月二日)

谷あひの温泉の宿に晝餉食ししづこゝろなく
降る雪をみる

白雪の降りこむ溪の川ぞひに並びて立てり山
の湯の宿

西山ゆ吹き來る雪の棚なせる溪間の河岸に立
てり湯の宿

溪川の淀の青みにうつりたる湯宿の灯おぼろ
にゆるゝ

さすらひて温泉に來つれ山荒れて溪間吹雪と
なれる日中に

西山に凧立つや見るくも吹雪逆まき溪をわ
たり來

山裾の停留場に居すくみて電車をまてば吹雪
たちさわぐ

旅にして幼子みればふりかへり立ちもどりのつ
つ家の子しのばゆ

うつり行く旅のこゝろにまかせつゝさすらひ
て來し山の温泉に

平泉にて

さむくくと杉の並木路いそぎつゝ暮れぬ間に
とて山にのぼれり(二月三日)

山の上の繪葉書店の小娘とかたりをるまにた
そがれてけり

雪ふりし東^{たは}稻山^{しのやま}の頂に日かげうつろひ暮ちか
き寺

杉むらのところへに並び立ち夕^{ゆふ}灯^ひちらちら
見ゆる山^{やま}裾^{すそ}

日の入りてをぐらくなりし杉^{すぎ}鉾^{ぼこ}の木立ぬひつ
つ寺みめぐれり

杉^{すぎ}鉾^{ぼこ}のむらがり立てる坂^{さか}路^{みち}の雪ふみゆけば衣^{ころも}
川^{がは}みゆ

さびしさに泣かまほしくもなりまさる灯^ひとも
しころひ寺を立ちいづ

毛越寺にて

朝日さす松の木かげの雪ふみてつはものども
の跡どころみる（二月五日）

一本ひとの松の木かげの碑いしを朝雪ふみて見まはり
しかな

さむくくと冬がれの野に立てる寺みめぐりを
れば朝日子あさひこのさす

杉鐺たがひのむらがり立てる寺並てらなみの小田おだの白雪さむ
しまばゆし

古寺や田並のはての杉むらにひびきて朝の鐘かね
なりわたる

岩谷堂を経て小山田へ

雪みちをかたむきはしる自動車の幌をうちつ
つ吹雪すぎ行く(岩谷堂にて)

—(64)—

訪ね來し友の家居は北上の河岸の堤手かけ杉
むらのなか(愛宕村にて)

北上をへだて、みゆる國道の松の木ぬれに並
び立つ山

こゝにしてまともにもみゆる山の穂を寄り寄り
つゝむ暮の雪雲

—(65)—

河並の枯芦の堤手のぼりつゝ船を呼ばへばこ
ゑはかなしも

—(64)—

松林すぐれば小雀四十雀上枝下枝をなきかは
し飛ぶ(小山田村にて)

ふるさとの小さき驛に下り立ちて風呂敷つゝ
み背負ひけるかな

教會にやごりて

いづかたへ行かばこゝろのなごむぞと下宿屋
いで、巷ゆきす

教會にかりのやどりをもとめえて行李はこべ
り雪ふる宵に

太鼓鳴り拍子木ひびきほがらかに教會の朝明
けにけるかな

ほがらけくこゝろおちゐて教會の朝のつとめ
の拍子木をさく

氷上運動會

一月廿八日、古河端にて

早池峰に朝居る雲のうすれゆき岩手姫神くさ
やかにみゆ

雪雲のうすれくゞてくさやかに秀つ嶺あらは
れさむき風立つ

かるくと身をひるがへしすべりをる少女等
見つゝ雪に立ちをり

川並の小田の氷に風立ちて雪ちりかゝるスケ
トかな

小岩井行

岩手山雲にかくろひ農場のはたて曇りて雪の
ふりをり(二月二十九日)

松原の深雪ふみつゝ行きかへり岩手の山に雪
はるゝ待つ

をりくは明るみ見せてそこひかる岩手高根
を雪ふり埋む

枯芦のそよぎてさむき雪原にたゞずみまてり
高根はるゝを

なだらかに雪のつもれる山一つあらはれそめ
て雪は晴れ行く

雪雲の四方にかき垂り西山ゆ風吹きよせて芦
なびき伏す

枯芦のそよぐとみれば前山の雲は千切れて雲
底光る

湘南へ

五月中旬、修學旅行隊に加はりて日光、江ノ島、鎌倉、横須賀
東京、鹽釜、松島を見る、その折の歌

かずくの調度入れてはそと出しまた入れて
をるバスケットかな

あたらしきバスケットさげ眞白なるパラソル
さして旅立ちにけり

しらくと梨の花咲く盛岡をかしまだちけり
笑みかたまけて

ちらくと中津川邊の八重櫻旅行く少女のパ
ラソルに散る

いそくと停車場さして行く子等のスカート
かるし櫻ちる宵

小袖こそでにもつゝみかねたるうれしさを笑わらみかた
まけて旅立てるかも

さみどりの川ぞひ柳灯ひにゆるゝ初夏ひの夜よを旅
立しかな

さみどりの柳並木にとりたる灯かけいそげ
りパラソルのむれ

初夏のさみどりふかき夜ぞらなどうち仰ぎつ
つ汽車をまちをり

雨けぶる川ぞひゆけば灯あかりに白きパ
ラソルの灯かけ

待ちをれば夜目よめにしるけきパラソルの灯かけ
につゞき子等はつどへり

一たびはねてもみつれどねむられぬまゝにま
たしも言葉かはせり(軍中にて)

あけそめし東ひがしの空のさみどりにそびて立てる

尖峰ミがかりをのみゆ

ほのくくと夜のあけゆけばさみどりの空ひろ
ごりて海につゞける

のぼりゆく坂の木の間に谷川のふちはくるめ
き青くよどめる(日光にて)

穂ほがしらのたかくなるよとみるひまに帽子は
とびて棧橋またせきをこゆ(江ノ島にて)

空はれよ雲あさまれとなぎさべに立ちてはる
けく海のはてみる

富士の根のみゆてふなぎさにわれ立てど富士
はもみえず雲のむれ居て

みやらかの木の間にみゆる邊に白きパ
ラソルむれていこへり(二重橋前にて)

うつりゆく島はみるくおもてむけうらをみ
せつゝ遠ざかりけり(松島にて)

近き島遠き島々おそくとく姿かへつゝうつり
かはれり

はるかなるおもひにこゝろを引かれつゝ海の
はたてをとみにみつめし

うつりゆく島をながめてをるひまに雲脚消え
て青空となる

島々をぬけてポートのみえがくれ海のはたて
ゆ目のまへに來し

かずくの島みえがくれうつりゆき波止場近
くへ船ちかづけり

三階のソファによればさみどりの島のかずか
ずあきらけくは見ゆ

朝風やうみのはたての島々もくきやかに見ゆ
こゝのペンチに

姫神登山

くきやかに岩手ほつ根のいたゞきにのこれる
雪ゆ朝雲の立つ(六月廿五日)

片そぎし岩手ほつ根をこゝにしてかへりみす
ればなだらかに見ゆ

朝雲のむれゐて峰のふもと野に日はかげりつ
つゝ一本杉のみゆ

攝政宮を仰ぎま

すめろぎの皇子のみ
たまふとしづもりか

水うちしごとく民草
ま迎へまつるも

梅雨はれし岩手秀つ
るか皇子のみくるま

かむながら神のみす
ぎてこゝろゆたけし

わが兄子と仰ぎまつ
ゑのすめろぎの御子

のわが皇子をいまし仰

つかへまし神のみす

りて

るまいまをしも着かせ

る(七月七日、盛岡縣にて)

づもりて皇子のみくる

はうち靡きむかへまつ

久方ひさかたの天あまつ御神みかみのみすゑなる皇子みこにおはせば
おごそかにます

山川やまがはもよりてつかへむ花鳥はなどりもいつきまつらむ
御子みこのみまへに

いつかしく立たせたまへる日の御子みこの御衣みえま
しろに見えし尊たかさ

白妙しろたへの御衣みえのはしのみえしさへ尊たかかりけり皇
子みこのみくるま

おほらかに立たせたまひてみそなはす皇子みこの
すがたを仰あやぎまつるも

まともにも迎へまつりていつかしき日嗣ひつぎの皇
子みこををろがみしかも

みくるまのおんまど近く立ちたまひ邊土の民
をみそなはず皇子

自妙の御衣を召して立ちませる皇子のみまへ
に面上げがたし

カーテンのかげより皇子のおほらかにあらは
れたまひぬやをうけます

田澤湖行

八月十二日、栗石川の溪流を溯り、仙岩峠を越えて田澤湖に
遊ぶ、その折の歌

むら山のせまれる峽の崖なだれ棧橋おちて溪
せかれをり

瀬の音はこゝの峠にひびきつゝ溪はもみえぬ
夏木立かな

たくなつく山のせまりておちあへる溪の底ひ
に白渦のみゆ

みてをればつぶく石にせかれつうづまき
流る溪あひの水

溪川の浅瀬を行けど泡立ちてくるめきさわぎ
裾をぬらせり

溪川をゆきつもとどりつ浅き瀬をわたりて行け
ば荒岩の崖

岩かげの淵の淀みに白渦のくるめきまはりか
げるふの飛ぶ

きりぎしをつたへて行けば道たえて藍をた
えし淵となりけり

幄くづれ架けはしおちて松の根は巖いははの上ゆ白
く垂れたり

橋は落ち幄は崩れて行く路のとだえし溪を越
えて尾をに來し

いくたびか木立をうねり登りけむ溪川の音た
えくくとなる

上りゆく木立のひまゆなだらかに裾を引きた
る岩手山みゆ

頂のまなかひにみゆ九十九折路ちに咲きなびけ
るは紫陽の花

いたゞきをやくくに下りて峯をを行けば片がはな
ぞへ白樺木立

そゝり立つ山重りて緑こき溪間々々ゆ白雲の
ぼる

白雲の群居る山をまなかひに眺めて下る國見
峠を

こゝにして音こそ聞かね千仞なす溪の底ひに
白渦のみゆ

群山をめぐり流れて早瀬なす溪川の水白く烟
れる

こゝにして國見をすれば岩手山早池峰岳は雲
に籠れる

熊笹のさゆらぎ立てる尾根みれば尾根の上よ
り雲なだれ来る

この尾根のなだれのはてはたゝなづく高嶺と
なりて白雲の居る

暮れ残る湖の岸邊に
ともし火の一つともりて
静けかりけり

白濱の湯槽にひたり暮れかゝる湖面みつゝこ
ほろぎをさく

暮れ行けば群山の隈こくなりて向つ岸邊の白
壁はみゆ

わが宿の二階の欄干にもたれつゝ暮れ行く湖
のいさり火をみる

うみべりの並木の影をくさやかにうつしゝま
まに朝風ぎにけり

朝雲の影のうごかぬ湖の面に鱒はをどりて静
けかりけり

朝雲の消えて翠の山の影うつりしまゝに風ぎ
し湖

湖かこむ翠の山に朝日さし群れをる雲のうご
き初めけり

山と空うつりしまゝに朝風ぎし湖の青さを掬
ひけるかな

さかしまに影ひたしたる湖べりの峰をかすめ
て朝雲の行く

鳥とばず魚はをどらず静かにも山をうつして
風ぎし田澤湖

群山ゆ雲立ちのぼり湖の風の青みに朝日さし
入る

とりよろふ山の後を白雲の行かふみゆれ湖の
底ひに

うねりたる峠路ゆけば瀬の音のまたしもきこ
ゆ森にひびきて

上りゆくまゝに麓をうねりつゝ岩にせかるゝ
溪川のみゆ

急ぎつゝ溪間を來ればうす日さしわが足もと
に木かげうごける

松尾にて

東路を下りたまへるわが敏を萩咲く野邊にむ
かへけるかな

越路經て奥の細路うちめぐり萩咲くころを敏
は來ませり

つゝがなく越路をこえてみちのくの細路づた
ひ來ませるか敏

いにしへのひじりにあひしこゝちにて敏のう
しろにしたがひ歩く(九月二十三日、曉鳥師を迎へて)

岩手山雲にこもらひ風立ちて雨ふりいでし祝
日の朝

いそくと長き廊下をゆき、する子らの歩み
も今朝ははれやか

ひとまはりまはりてバザールを出づるとき乏し
き財布さぐりみしかも(十月八日、創立廿五週年記念日に)

おくり來し栗をし食めばふるさとの足引の尾
根まなかひにみゆ

さむしろにつゝみて山の少女らはつぶらの栗
をおくり來しはも

栗食めば妹と相見の秋山のすゝきゆるゝもみ
ゆるこゝちす

おち栗を尾根にこゝだも搔きあつめわれにお
くりしそのこゝろはも(栗をおくられしに)

木三別邸にて

九月廿三日、敏氏の無量壽經を聴きつゝ

鉢^{はち}前の枝垂^{だか}桂^{かつら}のしだれ枝^{えだ}のしだれて晝のしづ
かなる庭

さしかはす枝ひろごれる笠松のかげはうつり
て波たゝぬ池

をりくゝに太^{たい}藺^いうごきて白雲のかげは亂るゝ
池のさゞ波

垣ごしにみゆる田並の劇場に入目うつりて赤
々ともゆ

色づける枝垂桂のしだれ枝の下葉こぼれて庭
静かなり

池の上に枝さしかはしひろごれる笠松に来て
雀なきをり

鈴成に梨の木の實の生れる枝しだれて池にか
げをひたせり

垣の外は稻田の近み寺のみえたゝらの山のま
なかひに見ゆ

観武ヶ原にて

雨はれて朝日のさせば八雲立ち観武ヶ原はし
めやかに照る(十月十一日)

とりよるふ青垣山に八雲立ちみなみの空のは
るかなるかも

青々と空はれわたりはろくくと觀武ヶ原のし
めやかに照る

朝雲の青垣山に立ちのぼり空ひろくと晴れ
し茨島はつじま

雲ちぎれ立ちものぼれば初雪の降れる秀つ根
の紅葉目につく

プロペラの音しさまじくとゞろけば末枯の草
そよぎてやまず

地ぢけむりを立てはしれる飛行機のみるく
高く輪をかきてをり

みあぐれば澄みわたる青空に輪をえがき
つゝ飛行機のとぶ

みんなみの空のはたてをみてをれば雲がくれ
つゝ飛行機来る

風立ちて雲の千切るゝ中空をみえがくれして
飛行機のとぶ

鳥のごと雲のさなかに消えさりし飛行機まで
ば公園の上

みるくも雲に消え行く飛行機をみつむる面
に時雨かゝれり

鳥のごと身をひるがへし雲を突き雲を起して
飛行機のとぶ

たちまちに雲捲きおこしプロペラの音すさま
じく舞ひのぼりけり

照りて降り時雨れて晴る、秋空の雲をよこぎ
るプロペラの音

青ぞらの晴れわたりたるたゞなかにほくろの
ごとき飛行機みえ初む

秋の庭

その一

庭さきのダリヤの花はうなだれてゆるゝをみ
ればしづくたれをり

秋雨のしづくたれつゝ庭さきのダリヤはゆれ
て咲き盛りをり

コスモスの莖ほそくとたわみつゝうねりし
さきに花をつけたり

ほそくとうねりたわみてのびし莖花をもち
たり庭のコスモス

風なきにうねりし莖のほそくとゆれて花は
も夕日あびをり

たわみたる上枝に咲きし白萩の花しらくと
日にてりてをり

風やあるをりくとゆれて白萩の上枝ほつね下枝しつねの花
こぼれけり

白萩の花しらくと咲きみだれダリヤのかけ
にひそみるしかも

コスモスの莖はみえねど花びらのひらめける
みゆ夕月のかけ

朝ごとに伸びてはほぐれいろまさる芭蕉をみ
つゝスリバはくかな

白萩の花吹きかへしコスモスの莖をなびかし
秋風のすぐ

窓下に白萩の花さき盛りわがよろこびとなれ
る庭かな

ダリヤ咲きコスモス咲きて朝庭のすがくし
もよこのごろの庭

黄に咲きしダリヤの花のうなだれてかけひた
しをり水のたまりに

黄に赤に咲きしダリヤのしどろにも風にゆる
れば庭の明るき

咲き盛りかはり咲きつゝ庭の面のダリヤの花
は日ごとあたらし

咲き盛るダリヤの花にしむ雨をまどべにみつ
つ人を待つ朝

コスモスの花をすかせばさくくくと砂利をふ
み來る子等の裾みゆ

つぎくゝに蕾は花になりゆきて日ごとあかる
しコスモスの庭

ましろなるダリヤの蕾花になり枝もたわゝに
ゆられをるかな

くれなゐのダリヤのなかにましろなる花はひ
らきてくきやかに照る(白梅校にて)

その二

ほそく^くと列貫^{りゅうくわん}き立てる一莖^{いつせい}の秀枝^{しゅうし}に咲けり
白きダリヤは

吾妹^{わが妹}子のうゑしダリヤの咲きつゞき狭庭^{せうてい}の秋
の朝はおもしろ

十坪にもたらぬ狭庭^{せうてい}にしげりあひこもく^くと
けり白きダリヤは

ひよろく^くと丈のみ伸びて蓄さへもたぬダリ
ヤは軒にせまれる

軒の端^はにせまりて穂立つ白ダリヤ次ぎく^くと
咲き庭はにぎやか

白壁に影をなげつゝひろごりし一本ダリヤ赤
き花咲く

塀ぞひに一畝蒔きし青豆の圃らにみのり枝た
わみをり

塀ごしに隣の庭木からみつゝこゝだ開けり朝
顔の花

一本のたわめるダリヤ風なきにさゆらさゆら
にゆれて花咲く

葉はしげみ枝はも延びし一もとのダリヤの立
秀蕾もちたり

うら畑の莢豆ひけば一本のダリヤ残りて赤々
と咲く

うら寒くなりゆく朝を葉はしげみ枝は撓みて
ダリヤ花咲く

豆引けばあとに残りし一本のかぼそきダリヤ
風にゆれをり(わが庭にて)

その三

つぎくに花はしげみてゆらゆらに千成へう
たん垂れそめにけり

秋風のいゆりなびかすコスモスの花はちらち
らまど越しに見ゆ

白萩の上枝なびかし下枝をば吹き越す風に花
びらの散る

白萩の小枝が諸葉のしげみより白き花びらこ
ぼれ落ちたり

うゑおきし赤きダリヤはをとめらの丈をもこ
して花を開けり

ひとゝきに咲かんともせず次ぎくくに蕾を持
てり庭のコスモス

大輪の赤きダリヤはうなだれて諸葉もろはのかけに
咲き盛りをり

朝にけに上枝の蕾ほぐれ咲きさやかにゆれ
コスモスの庭

のびくし上枝下枝に蕾もちつぎくひらく
コスモスの花

葉はしげみ上枝はのびて朝にけに蕾をもてり
赤きダリヤは

白萩の花散りしきし前庭まへにわにダリヤは雨にぬれ
つゝぞ咲く

秋雨にぬれてダリヤのおもくとかたむき伏
せり枝もたわわに

たわみたる莖におもく雨露の垂れてうごか
ずコスモスの花(白梅校にて)

大慈寺の傍に住みて

松風の音にまじりて瀬の音のきこえ來にけり
小松野行けば(十月二十二日、滋民村にて)

啄木のつぶらなる目の夕やみにうかぶこゝち
す古寺の庭

風なきに落葉ちりくる寺の庭見めぐりをれば
たそがれとなる

うら庭の伽羅の茂みに夕やみのせまりて池の
うす明りかな

塀ごしに夕焼空をとぶ鳥目にはうつれりテニ
スタけなは(十月三十一日、テニスの試合を見つゝ)

半圓はんえんをえがけるボール見上ぐれば夕やけぞら
に月はかゝれり

庭さきのダリヤの花のほの白くたそがれそめ
てテニスたけなは

うちかへすまりはうねりてさみどりの夕空か
すめせなかひにおつ

地をけりてをどるとみればせなかひにおちし
ボールは打ちかへされつ

ゆきかへるまりのあとおふ少女らの目のかゞ
やきて夕焼けにけり

うち寄する波にゆられて芦の葉のさゆらさゆ
らに起伏をすれ(十一月七日、上田の堤にて)

ほそくと烟を立て、一年はすぐしつるかも
松尾通に(大慈寺の傍に住みて)

白などをかりあつめ来て狭庭邊に餅つきを
ば暮の雪ふる

松かさの三つ四つつきし片枝を門邊に飾り春
を迎ふる

火をもすぎ死しのさかひもうちこえて四十路よの
坂をひとり行くかも

火をも過ぎ行きて

(完)

大正十二年二月廿五日印刷
大正十二年二月廿八日發行

【定價金七拾五錢】

著者

小田 島 孤 舟

發行人

東京市日本橋區檜物町九番地
西 村 辰 五 郎

印刷人

盛岡市紺屋町二十一番戶
熊 谷 春 治

發行所

東京市日本橋區
檜物町九番地
東雲堂書店
電話本局一八七一・振替東京五六一四

